

# 「○つけ法」を実施している教師の 意識の変化に関する調査研究

愛知教育大学 志 水 廣

## 1. 研究の目的

今回、述べたいことは、次の2点である。

- (1) ○つけ法とは何かについて述べる。
- (2) ○つけ法を実施している教師の意識の変化について調査をもとに述べる。

## 2. ○つけ法とは何か

### 2-1. ○つけ法の定義

○つけ法とは、「机間指導で、子ども一人一人の解決過程に対して、肯定的に評価し、即時に指導を行いながら赤ペンで○をつけていく方法」である。その際、子どもの学習意欲の向上と問題解決の促進を支援するようにする方法である。(志水, 2004)

授業中の子どもの反応には、ノートやワークシートに現れる図、式や答え、説明などがある。教師は机間指導で回りながら全員に○をつけていくのである。教卓のところで教師が○をつけるのではなく、教師が回る出前方式である。

○つけ法は、子どもが問題を自力解決しているとき、子どもの思考の表れ(外化)をその場で評価して、その子に合う「声かけ」をして、解決できるようにする手法である。3分間で40名の子どもに対して○をつけ、教室を1周することを目標にしている。だから、瞬間の認知と判断が教師に要求される。子どもができていれば、教師は即座に○をつけることができる。ところが、子どもがつまずいていたり、勘違いして「ずれ」ていたりすることがある。その場合、部分肯定しながら「声かけ」をして指導するのが特徴である。

さらに、○つけを全員にしていくと、子どもの全体的な様子を把握することができる。だから、○つけ法は、その後の授業の方向性を決める手法でもある。このようなことから、○つけ法は評価と指導の一体化をめざした方法である。

実際に○つけ法をするためには、①スピード、②正確さ、③声かけ、④実態把握、⑤判断、⑥次への指示、の6点が大切である。

### 2-2. 教師・子どもにとっての○つけ法のよさ

○つけ法をすることによって、教師及び子どもにとって次のようなよさが考えられる。

- (1) 教師にとってのよさ

- ① 子どもの実態を把握することができる。

- ② 子どもに○をあげられて嬉しい。
- ③ ○つけをするためには、教材のキーポイントを明確にすることができる。
- ④ ○つけ法をすると、子どもができないという現実と直面する。だから、逃げられない。できるようにするために、瞬時に指導の手だてを考えることになる。
- ⑤ 即時指導なので、できていないことを次時に残す必要がない。
- ⑥ 子どもと1時間に1回でも声かけすることによって、関わりをもつことができる。生徒指導にもなる。
- ⑦ 授業の中の区切り目をそろえることができる。

(2) 子どもにとってのよさ

- ① ○をもらおうと嬉しい。声かけしてもらおうので嬉しい。やる気が出る。
- ② ○になるまでがんばろうとする。40番目の子どもでもがんばる。
- ③ 途中のプロセスを認めてもらえるので、考え方の見通しがもてる。どこまでが○でどこからが間違っているのかを自覚することができる。
- ④ 個に応じたヒント、助言をもらえる。
- ⑤ ○だから、自信を持つことができる。つまり、発表する意欲につながる。

### 3. ○つけ法に対する教師の意識について

#### 3-1. 問題意識

現在、○つけ法は、公に出版物(志水:2004a)としてもだされ、また○つけ法に関するセミナー(\*)も実施されている。愛知県内はもとより少なくとも8県にわたって実践されている。算数・数学の授業に取り入れることによって、かなりの効果があると報告されている。多くの指導顧問校では3年間、継続して○つけ法に取り組んできている。それが、現場で○つけ法が受けいられている証拠である。逆に言うと、効果の期待できない方法は3年間も継続されないからである。そこで、○つけ法は、効果があるのだが、では、一体どこにその要因があるのだろうか。

○つけ法が子どもの学習意欲の向上につながる(志水:2004a)ことは、調査されて報告されている。また、○つけ法が、子どもの達成感に対する内発的及び外発的な動機付けの観点(志水:2004b)からいって当然のことであろう。

さらに、筆者は、その要因は○つけ法をする教師の意識の変化にあると予想した。ところが、教師に対する意識調査は行われていなかった。よって、今回、調査することとした。

今回の調査の一部については、第37回数学教育論文発表会(志水:2004b)において一部を発表した。その後、追加データがあったので、それらをもとにあらためて再整理しなおした。

#### 3-2 調査の概要について

ここでは、○つけ法についての教師235人を対象に調査を実施した。その結果の一部について報告する。

- (1) 調査の目的: ○つけ法に対する教師の意識を明らかにする。すなわち、○つけ法につい

て教師がどのように思っているか、また、〇つけ法をすることによる教師の意識の変化について調べる。

(2) 調査対象：アンケート全体人数235 人

〇つけ法を実施している小学校・中学校の教師232 人。

内訳：小学校：13校、1団体、(小学校教師213人、中学校教師19人)

小学校の範囲は、愛知県、京都府、和歌山県、広島県、福岡県、長野県

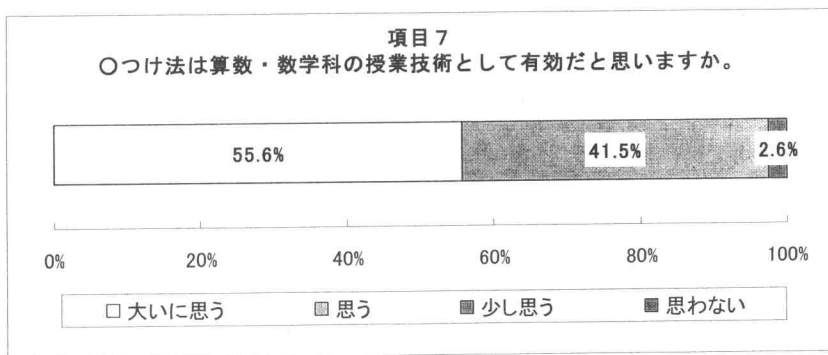
(3) 調査時期：2004年9月上旬

(4) 調査項目：全体は31項目あるが、そのうち、〇つけ法に特に関係する項目は20項目である。

### 3-3 調査結果について

(1) 項目7. 〇つけ法は、算数・数学科の授業技術として有効かどうかについて質問した。

〔結果〕 下記の帯グラフに示す通りである。

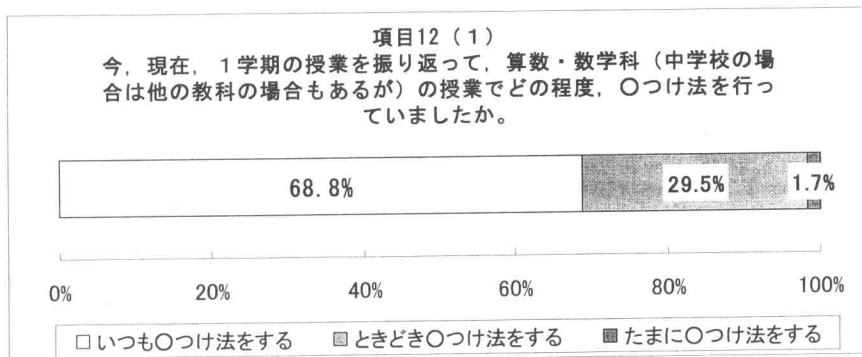


〔考察〕 その結果、大いに有効が55.6%で、思うが41.5%で、合計97.1%の教師が〇つけ法の有効性について認めていると言えよう。

(2) 項目12. 実際に〇つけ法をする回数に関する質問である。ただし、〇つけ法が可能な教材についての回答である。

ア どの程度していましたか。

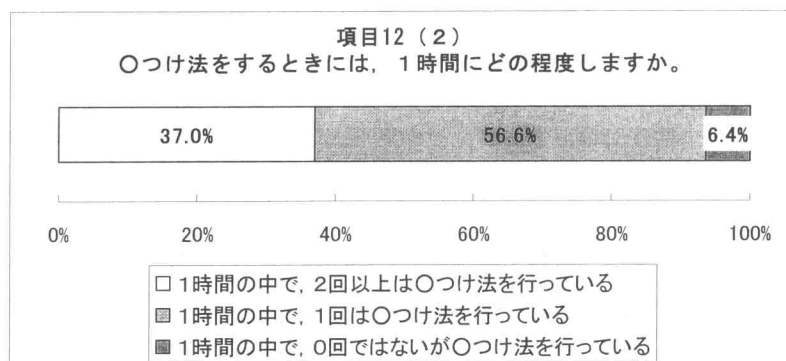
〔結果〕



〔考察〕この質問に対しては、「いつもする」が68.8%、「ときどきする」が29.5%、「たまにする」が1.7%で、98.3の人がだいたいしていると考えてよいと思われる。「いつもする」が70%近い数値だということは、教育技術としてかなり認知されてかつ実践されている証拠である。

イ 次に、1時間の中での回数を質問した。

〔結果〕



〔考察〕1時間の中に2回以上する人は37.0%で、1回という人が56.6%であった。0回ではないが1回未満の人が6.4%いた。この結果から、1回以上する人が93.6%いることがわかる。つまり、1時間に2回以上する人が37%もいるので、この人たちはかなり意識的に机間指導していると言えるだろう。

(3) 項目13. どんな場面で○つけ法をしているかどうかを質問した。複数回答可

〔結果〕導入場面で前時までの復習をするとき・・・47.7%

本時の問題で解決の見通しをたてるとき・・・46.6%

自力解決のとき・・・67.7%

適問題で練習のとき・・・66.4%

〔考察〕複数回答可ではあるが、○つけ法の場面は、自力解決や練習の問題のときが多いと言えるようだ。

(4) 項目15. 教師の意識について質問した。○つけ法を授業に取り入れてみた感想について質問した。

〔結果〕ア ○つけ法を取り入れてみて、かなりよかった・・・40.9%

イ ○つけ法を取り入れてみて、よかった・・・58.3%

ウ ○つけ法を取り入れてみて、あまり変わらなかった・・・0.9%

エ ○つけ法を取り入れてみて、少し悪くなった・・・0%

オ ○つけ法を取り入れてみて、かなり悪くなった・・・0%

〔考察〕「かなりよかった」と「よかった」を合計すると99%の人が、○つけ法について取り入れてよかったと思っている。圧倒的である。

(5) 項目16(1) ○つけ法を取り入れてみてどんな点が良かったかを9項目あげて、複数回答可として回答してもらった。その結果は、次の通りである。

質問項目：「11でア「かなりよかった」、イ「よかった」について答えた人に質問します。

- ① どんな点が良かったですか。複数の回答可です。当てはまるものを全てを選択して下さい。」（有効数235 人）

〔結果〕

- 1) 子どもの実態を把握できること・・・・・・・・・・92.3%
- 2) 子どものつまずきを訂正できること・・・・・・・・77.4%
- 3) 子どもに声かけができること・・・・・・・・・・88.5%
- 4) 子どもがやる気を見せるようになったこと・・・・63.4%
- 5) 子どもの実態が速く見るできるようになったこと・・・・55.7%
- 6) 部分肯定で子どもに声かけができるようになったこと・・・・46.0%
- 7) 実際に、子どもの学力が伸びたこと・・・・・・・・14.0%
- 8) 評価と指導をその場でできること・・・・・・・・44.7%
- 9) 子どものノートの書き方が整ってきたこと・・・・26.4%

〔考察〕〇つけ法をしている教師は、〇つけ法に対して良かったこととして、実態把握、つまずきの訂正、声かけができること、子どものやる気の向上などをあげ、上位を占めている。下位の部分としては、子どもの学力の伸びについては感じていない。学力の伸びよりも意欲の面やつまずきの面に注意が言っていると解釈できよう。

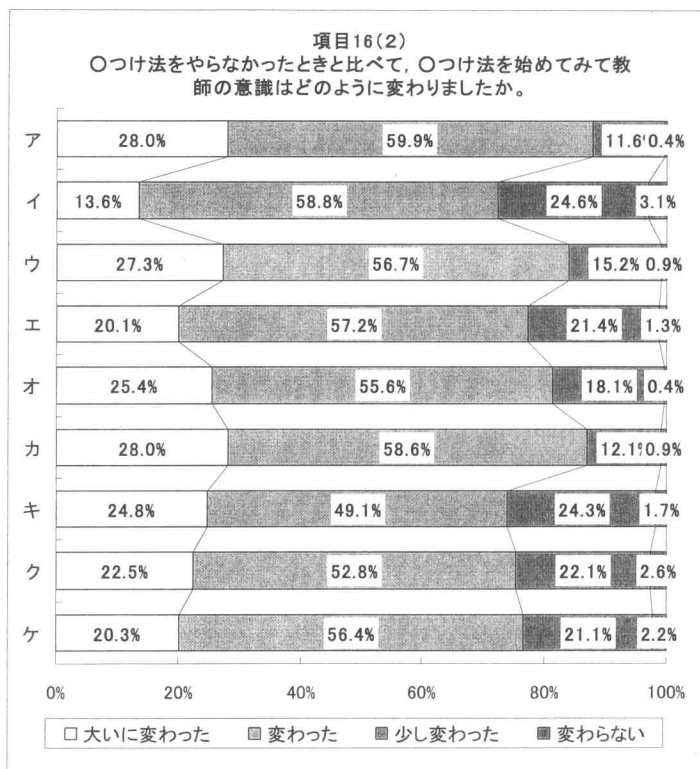
なお、学力が伸びたことに関する%が低いのは、他の項目に比べてという意味だと解釈している。というのは、〇つけ法を実施している学校では、学力調査（CDT、CRT）を実施しているが、いずれも昨年度より実績が上がったという報告がかなり来ているからである。

（6）項目16(2) 教師の意識の変化についての9項目の質問をした。

質問項目 16(2) 「〇つけ法をやらなかったときと比べて、〇つけ法を始めてみて教師の意識はどのように変わりましたか。

- ア やらなかったときよりも、子どもの実態をみようとするようになった。
- イ やらなかったときよりも、子どもが「できる」「わかる」ようになったので嬉しい。
- ウ やらなかったときよりも、子ども一人ひとりに対応ができるようになった。
- エ やらなかったときよりも、子どもの意識が向上して嬉しい。
- オ やらなかったときよりも、〇つけ法の場所を考え、指導のポイントを意識するようになった。
- カ やらなかったときよりも、〇つけ法での声かけの必要性を考えるようになった。
- キ やらなかったときよりも、子どもを部分肯定的に見ることができるようになった。
- ク 教師が、子どもが「できる」「わかる」ように頑張ろうという意欲が向上したこと。
- ケ 実態把握によって、その後の授業展開を変えようと思うようになったこと。

〔結果〕次の帯グラフで上の項目と対応する。



〔考察〕質問項目のアからケまで全般的に教師の意識は、大きく変わった、変わったという2つの選択肢を選んだのが、71%から86%の範囲に渡っている。このことは、○つけ法が9つの項目に対してではあるが、教師の意識にプラスの変化をもたらすものと言えよう。つまり、○つけ法は、子どもの意欲向上の面でも効果があると考えられる（志水：2004b）が、教師にとっても指導改善をしようという意欲の向上や具体的な指導のあり方を変化をもたらすものと言えよう。

○つけ法では子どもも教師も頑張るということだ。

それが証拠に、自由記述の欄では、次のような回答が寄せられた。

- ・ 以前より、一時間一時間の授業を真剣勝負で取り組むようになった。
- ・ 個を大切にするようになった。
- ・ ○つけ法を学校内で採り入れ、仲間とも刺激しあって、共に授業のレベルアップにつなげようとしている。
- ・ 子どもと共に学ぼうという気持ちが出てきた。
- ・ 一人一人に対応するので、もっと子どもがよくわかるように、もっと元気になるようにと、指導に力が入るようになりました。
- ・ 教材研究の視点が定まった。
- ・ 机間指導が明確になった。

・〇つけ法をする場所をどこにするか考えることで、毎時の授業の組み立てが自然と立てやすくなった。

このように、〇つけ法で教師の意識も変わるのである。

### 3-3. 本調査での全体的な考察と感想

当初の予想、即ち、〇つけ法をすることで、教師の子どもに対する意識が変容するのではないかという予想は、本調査の結果、明らかに証明された。

再度繰り返し述べることになるが、〇つけ法は、子どもは問題の解決の達成感をうることで、または解決過程を部分肯定されることで満足することになる。しかし、〇つけ法は、子どものみならず、教師の意識をも変化させる教育技法なのである。

長野県Y小学校のG教頭先生は、筆者に対して「教師達がにこにこしながら〇つけしています」ということを報告してくれた。そこには、子どもに〇を与えることの喜び、どんな反応をしているかという実態把握に努める教師の姿がある。さらに、筆者としては、子どものよさを見いだしていく教師になるために、〇つけ法が役立つことを願っている。

## 4. 本研究の成果と課題

本研究では、〇つけ法についての紹介、〇つけ法を実施している教師の意識の変化について述べることができた。〇つけ法は、教師に対しても個に応じた指導改善の動機づけとなることが証明された。なお、今後は、このアンケートでまだ未整理の部分があるので報告したい。

### ——引用・参考文献——

志水 廣（1997）．分かる・できる算数授業づくりのコツ，明治図書，p p 57～62

志水 廣（2004 a）．算数科「〇つけ法」で授業が変わる・子どもが変わる，明治図書

志水 廣（2004 b）．教師が机間指導において，子どもの解決過程を肯定的にとらえていく指導技法：「〇つけ法」の提案，第37回数学教育論文発表会論文集，p p 571 ～566

\*授業力アップセミナー：〇つけ法や復唱法の実技講習会を筆者らは実施しており，現在までに全国で13ヶ所，の800名近い人が参加した。